

山田男と白滝姫伝説 毛利 隆志 氏の編さんによる

《山田男・白滝姫伝説》

この伝説は柳田国夫監修「日本昔話名集」に完形昔話の部、幸福な結婚の類型に「山田白滝」として取り上げられている。しかし、鎌倉地区のごとき公卿の姫君と結婚するのは異色で、一般的には金持ちの娘との結婚話です。

今から約800年ほど前(鎌倉三代1203~1219)、山田鎌倉、現在の田中正治氏の遠い祖先に二人の兄弟がありました。兄は当然ながら家を継ぎこの地にすみましたが、弟は志を立て京都に出てお公卿に使えました。元より利発の男なれば「山田男よ」「山田男よ」と皆に愛されました。

ある日のこと、湯殿の湯を沸かし湯加減もよろしいとその旨を公卿の娘白滝姫(三女)二申し上げました。姫は湯殿に来、湯加減を試されたところ少々厚かったので、山田男に「水を持って」と仰せられま山田男は早速かきこまって手桶の水を持ち湯壺へ注ごうとした時、いかなるはずみか手桶の水が媛がお召の袖にかかってしまいました。この時、田舎者とはいえ誠実な山田男にほのぼのとしたものを感じていた白滝姫は後ろ向きに振り向きざまに歌をお詠みになりました。

「霞(かすみ)さえ かかりかねたる 白滝に 心かけるな 山田男よ」

このような高貴な公卿の娘とはいえ、日頃から白滝姫に淡い慕情を抱いていた山田男は、すかさず

「照り照りて 苗の下葉の 枯れる時、山田に落ちよ 白滝の水」

と歌でお返ししました。

この有様を一部始終陰できいていた白滝姫野父親は、二人の成り行きを察し、山田男に「媛を汝に嫁として与えるから、媛を連れて故郷へ帰れ」とお言いつけになりました。一方、白滝姫も遠い北国での暮らしをご承知になりました。この時代は公卿と一般の人との結び合いは国外追放という厳しい掟がありました。せつかく志を立てて京に上った山田男でしたが、掟に逆らう訳にもいかず仕方なく故郷へ帰ることにしました。

しかし二人の足取りは軽く、途中敦賀より放生津までの水路、放生津から山田への陸路、長の道中もつつがなく家に帰りました。出発の際、嫁入り道具は勿論のこと、母君より形見に黄金造りの合わせ鏡を送られました。

山田男は姫との成り行きを家の者に詳細に説明しました。家の者達は大変驚いて、そのような高貴な同居するのは恐れ多しと、川向うの山(向い原鏡が窪)に新居を築いて兩人を住ませました。二人はここで生涯中睦まじく過ごされました。(山田郷土史より)

《鏡の宮の縁起》(白滝姫伝説のその後)

その22~23代後の田中家で。東の空より太陽が昇り向い原を照らす頃になると、川向いの山田男と白滝姫の屋敷跡より、どんどこんどこと神楽囃子が聞こえてきました。初めの内は何とも思っていないでしたが、あくる日もあくる日も聞こえてきました。不思議に思った当主はふと白滝紐の事を思い出し、これは確かにこれは確かに姫の親の形見の黄金の合わせ鏡が土に埋もれているに違いないと村中で屋敷跡を掘り起こしました。しかしとうとう鏡を見つけることはできませんでした。

今を去ること凡そ200年前、蓮華寺村の九郎右エ門なる者に夢のお告げがあったとういことで、当時の田中家の当主八郎兵衛を訪ねてきました。そして、古い祖先が建て春秋2回祭礼を行ってきたという祠(ほこら)の境内より一面の鏡を掘り出して行きました。(現在の外輪野用水の守護神となっています)

又もう一面は明治18年9月、八郎兵衛の希望により鎌倉の人々により祠の大門を拓げる作業をしていました。中川善右衛門、杉林円四郎と一緒に茅株を起こそうと打ち込んだ桑先にカチンと金音がし、不思議に思い土を除くと一面の鏡が出てきました。善右衛門がすぐに八郎兵衛を呼びました。八郎兵衛は鏡を手に取りおし頂き「これこそ伝え言う先祖の宝鏡に違いない」と、直ちにほ祠にまつり一同で礼拝しました。その後、鏡の宮は遠方にて参拝困難ゆえ氏子八幡宮に合祀されました。鏡の宮跡には石碑が建ててあります。(山田郷土史より)

《地名のいわれ異聞》

「山田男と白滝姫伝説異聞」もあります。その中で山田男が奉公したのは現在の神奈川県鎌倉市であり、武家に奉公したとあります。そして山田男は大変な美男子で有り姫と恋をしたとされており、名誉ある武家としては奉公人と姫を近辺に置くことを避け、男の故郷山田郷へ多大なる支度で送り届けられました。そしてこの地を鎌倉と名づけたというものです。(山田村史より)